



NPO法人 いのちの里 京都村/京都府

食と命のあり方を 広く伝えていきたい

自信をもってシカ肉を販売したい、と20代で飛び込んだ狩猟の世界。日本のジビエ界を牽引する存在として、若手女性ハンターに注目が集まっています。
取材・文/岸田直子 撮影/原田圭介



上/NPO法人 いのちの里 京都村の活動の一環として、農山村の野菜を京都市内で販売。右上/京都村のゆるキャラ・シカナイさんとイベントを盛り上げることも。右下/シカ肉を使った肉まん「京都もみじ」。



上/免許取得後は、先輩猟師から実猟を学んだ。現在は、これから猟師を目指す人に向けてのツアーなどに、先輩猟師として参加している。左/猟のときに必ず身につける弾帯ベルトとナイフは、先輩猟師にもらったもの。



平日が活動的だから、休日は静かに過ごします



左/陶芸が好き。奥は陶芸市で買ったお気に入り。手前は初めて自分で作った作品。上/読書も好きで西加奈子さんの大ファン。「好きな本はポロポロになるまで繰り返し読みます」。



左/月1回開催している「べにそん会」。リピーターも含め毎回20人ほどが集まる。右/参加者にふるまう、林さんが獲って調理したシカ肉料理。「おいしい!」と好評。



誤射を防ぐために、山に入るときは自然界にない色の服を着る。

シカの肉を売る立場から 狩猟の世界へ

牛肉や豚肉は食べるけれど、シカの肉を食べるのは抵抗がある。そういう人は少なくありません。NPO法人 いのちの里 京都村の事務局長を務める林利栄子さんが、狩猟の世界に入ったのも、小さな女の子の一言がきっかけでした。「京都村のイベントでシカ肉を使った肉まん『京都もみじ』を販売していたときのこと。『シカを食べるなんてかわいそう』と言われて、そのときの私はきちんと説明できなかったんです」

売る立場である以上、しっかりと知識を身につける必要がある。そう考えていたときに出会ったのが、ジビエハンター(獲物をさばって食べる猟師)の垣内忠正さんでした。また、京都村の活動目的は、過疎や高齢化などの問題を抱える農山村と都市をつなぎ、双方の利益に寄与すること。「京都市内に生まれ育ったので、農山村に関する知識がありません。でも、自分には移住や農業は向いていない……」とも考えていた時期だったので、「狩猟をやってみたらいいやん」という垣内さんの一言が胸に響きました。狩猟免許を取れば、市内に住みながらでも農山村で活動できる。そこで、猟師になることを決めたのです。

猟師の知識を ジビエハンターにつなぐ

2013年の免許取得以来、狩猟期間の11月から3月は毎週末、南丹市や京丹波町の山へ。年間5頭ペースでシカを捕獲しています。林さんが所属する猟友会の会員は約40人。その3分の2は60歳以上で、林さんが最年少です。「猟友会のメンバーは、鳥獣被害や『ジビエ』普及のためというより、趣味で猟をされている人が多いです。でも、山や獲物については知り尽くしている。その猟師としての知識を、ジビエハンターへ継承していくことが、私にできることじゃないかと思っています」

これから捕獲する動物が人の口に入るということを意識して狩りをし、衛生的な解体を行う。ジビエハンターは、厚生労働省によって定められた野生鳥獣肉の衛生管理に関する指針(ガイドライン)を遵守しなければなりません。そうした正しい知識や技術を、広く伝える活動にも林さんは積極的に取り組んでいます。

何を選び、何を食べるのか 知識を広げるための食育

「今は食べ物がたくさんあり、簡単に手に入る時代です。だからこそ、何を選び、何を食べるのか、自分で選択していくための知識が

必要だと思えます」

そのため、獲った肉を鳥獣被害やシカ肉に興味のある人たちにおいしく調理してふるまうイベント「べにそん会」(「べにそん」とは英語でシカ肉の意味)を、2015年から主催しています。また、子どもたちと一緒に山に行き、実際に農家が野生鳥獣から受けている被害を見せることで、捕獲の必要があること、その命を食として生かすことを伝える食育活動も行っています。

2016年からは京都市内の有害鳥獣駆除隊でも活動するなど、ジビエハンターになったことで世界がどんどん広がっていった林さん。おしゃれで人なつっこい京女は、狩猟が解禁されているこの時期、ジビエハンターとして命の現場に立ち会っています。

Profile 林利栄子さん

1988年、京都市嵐山生まれ。大学卒業後、大手生命保険会社で営業職として1年半ほど働き、離職。2013年にNPO法人 いのちの里 京都村の事務局長に就任。同年秋に狩猟免許取得、2014年からジビエハンターとして活動を始める。2016年から有害鳥獣駆除隊に参加。所在地/京都市上京区今出川通寺町東一丁目67 <http://kyotomura.jp/>